

はじめに

幼い頃から弓矢を認知し、1射で標的に当てる動作に魅了されてきた。体験入部で聞く監督の発言が、私の人生に大きな影響を及ぼす。練習を重ねれば、全日本クラスの選手になれるという内容だった。監督は過去に、同種目で世界大会に出場した経験を持つ。私は存在価値を見出してくれた練習に、一層溺れていく。これまでクラシックバレエ、ピアノ、書道、水泳の経験を持つ。アーチェリーで必要とされる筋力且つ精神を研ぎ澄ます経験など、した覚えはない。動きの強弱や、指先や四肢で動きを表現することは出来る。しかし静の中で動を生み出して、あたかも何事も無かったかのように矢の反発を体で受け止める。当時の私には、それができると把握する力はなかった。近年フィールドアーチェリーのベアボウ女子部門では、20歳代の優勝者が生まれ続ける。これは山中で行われるために崖の上下や谷の向こう側へ設置された的を射抜く競技だ。照準器の無いベアボウは、矢先で照準を見立てて的の中心に当てる。弓道やターゲット競技とは異なり、一定のフォームを維持することが出来ない。アーチェリーは昭和45年日本体育協会に正式加盟を果たしたが、近代スポーツとして確固たる地位を手にしたもののフィールドアーチェリーは「山中で当てる技術」を文献に残してこなかった。

ねらい

先行研究から「ベアボウの身体論」についての考察することが出来る。ベアボウの重要性が高い技術をまとめることで一般的弓術間との身体技法の区別を明確化する。

研究対象

皆が同じ道具を使うものの、人によって矢の当たり具合が異なる。狙った場所にまっすぐ矢を飛ばす技術をどうやって手に入れたのか。当たらない的があつて当然だ。照準が付かない中での狙いが、ベアボウならではの軸の重要性を説く。本研究では、ここで用いられた軸のとらえ方に関する身体論について再検討する。ベアボウはハンドル、上下に装着するリム、弦のみで構成された弓の総称だ。構造は同じだが、ハンドルとリムが一体化して弓道の鞘に似たものをワンピースボウという。対してベアボウに照準器とスタビライザーを装着すると、リカーブになる。ここではベアボウのみを研究対象とする。

先行研究、研究方法

本研究ではジョセフ・ペアレント「禅パッティング」(初版2007)をはじめ、中嶋常幸「40歳にしてわかる理にかなうゴルフ」(初版2002)といった身体の基盤と成りえた作品を使用する。ゴルフを比較対象にする。同じメンタルゲームとして、標的に近づいてゆくとても似通った競技だ。

経験から得た結果とそこから学んだ手段をもとに、左ハンドル使用の観点からベアボウについて紐解いていく。卓球も候補にあがった。卓球台を的に例えると、上半身の過度な消費、踏み込みの具合やテニスとは異なった限られたフィールドで繰り広げられる相手への一撃。しかしゴルフはこれを超えて、自然の中での一点を求めた所がフィールドアーチェリーと切り離すことは出来ない。だからゴルフを対象にすることにした。これらを通じて、ベアボウの身体技法を考察する。

結論

ゴルフの先行研究を踏まえて考察すると、指摘された感覚はベアボウと大いに共通していることが理解できた。たとえば身体感覚でいえば、筆者が今まで大切にしてきた「軸」という概念が同じように重要性の高いものということが理解できる。また、足裏で地面を感じ、下半身全体で地面と結びついた感覚を身につけることがパフォーマンスの向上につながるということはベアボウの身体と大いに共通するところであり、異なる競技に共通の身体観が潜んでいる事実を明らかにできた。また、心理面では一般にも通じることではあるが、好ましくない状況への対応のあり方によってそのパフォーマンスが異なってくるということが理解され、まずは集中する土壌の構築が当たり前のように重要な要素であることが確認された。ともに相手と自分の駆け引きが重要な要素であり、自身がおかれた苦況に際して「攻めの意識」が問われ、自身のメンタルをコントロールする技術が重要なものとなる。あわせて本研究では山岳の中で自身の身をさまざまな状況を安定させながらそのパフォーマンスを追及するベアボウを、アーチェリー、和弓などのいわゆる「弓術」の中に位置づけることによって、和弓や一般的なアーチェリーの中では必要とされない特異な「軸」の存在とその重要性が明らかにできた。自身が日本のトップアスリートとしての経験を踏まえてその心理状態、身体感覚を先行研究や近接する弓の世界と比較検証することで、いままで学術の世界で問われることのなかった、いや問われることで、引くこと、射ること、そして心身の訓練を重要視とする弓術とは、別物と考えるべきだという結論に至った。